

ている。

177. X線写真で診断しえた新生児内臓奇形の三症例

(横須賀共済病院) 山田 章雄

症例1. 母親は26才, 2妊1産, 家族歴に特記すべきことなし. 現病歴として妊娠9カ月頃より羊水過多, 下肢の浮腫が著明となり予定日超過で3,350gの男児を吸引分娩した. 分娩直後より児はチアノーゼが強く, 胃カテが口腔より5cm以上入らず, 食道閉鎖を考え, 生後28時間で開胸手術を施行した. 手術所見は食道気管支瘻および下部食道欠損症であつた. 手術は瘻孔閉鎖および胃瘻造設術に止まつたが, 術後3日目, 肺炎を併発し, 死亡した.

症例2. 母親は25才, 1妊0産, 家族歴に特記すべきものなし. 現病歴として, 妊娠10カ月に羊水過多を疑われ, 2,720gの男児を自然分娩した. 児は外表面的には奇形は認められなかつたが, 分娩後第1病日より嘔吐がはげしく, X線写真で Pylorus stönose を疑い, 直ちに手術を施行, 手術所見は脾臓をはさんで小腸両側が盲端状態のいわゆる腸欠損症であつた. 手術は胃腸吻合術を行ない, 児は現在半年経過しているが, 順調に発育している.

症例3. 母親は33才, 2妊2産, 家族歴, 現病歴に特記すべきものなし. 妊娠10カ月に 3,220gの男児を出産, 出産時, 肛門周囲の皺が正常であつたため, 鎖肛に気づかず, 生後第1病日目に腹部膨満, 無便に気づき, X線写真の結果, 軽症の鎖肛であることが判明, 直ちに手術を施行, 手術は単なる開肛術で終つたが, 経過は順調であつた.

178. 新生児皮下脂肪壊死症の1例

(函館市立病院)

○斎藤 良治, 田村 是六, 金城 盛吉
大橋 一夫, 佐藤 晋一

生後10日目頃より両臀部, 大腿後面にほぼ対称性, 軽度発赤を伴つた境界明瞭, ゴム様硬度の皮下硬結を触れ, 圧すると泣き体温その他一般状態に変化なく, リンパ腺腫脹, 四肢運動障害は認められなかつた.

フレグモーネの疑いで局所の冷湿布, 抗生物質を投与したが, 次第にその硬結は下方(膝関節後面, 下腿後面)にひろがる傾向さえみられ, 新生児羶皮症の疑いで皮膚科を受診させた.

血清蛋白分画において γ -globulin が3.89%と低値であつた他血液像, 尿所見, 肝機能, 血清コレステロール値などに異常を認めなかつた.

臀部硬結部の病理組織所見上, 表皮, 真皮に著変なく皮下脂肪組織において脂肪小葉辺縁部および脂肪細胞間にリンパ球, 組織球, 異物巨細胞を主体とする高度細胞浸潤が認められ小葉間結合組織が増殖していた. 脂肪細胞の多くは変性し, 細胞中にはこの疾患に特有とされる放射状, 扇状構造が認められ, この構造物はズダンⅢ染色で難染性であり淡く赤褐色に染まつていた.

上記所見より新生児皮下脂肪壊死症と診断され, 局所の保温, マッサージにて経過観察したところ, 硬結の増大は生後約1カ月にて自然停止し, その後は周辺部より次第に吸収され生後2カ月でほとんど触れなくなつた.

新生児皮下脂肪壊死症は本邦報告27例を数えるにすぎず比較的まれな疾患なので報告する.

179. 臍帯血管腫の1例

(静岡済生会病院) 伊藤 巖, ○伊藤 暁二

1) 研究目的: 臍帯の腫瘍は比較的まれであり, 殊に血管腫はきわめてまれなものの1つである. 本邦においては昭和36年, 森塚等が報告しているただ1例がみられるに過ぎない.

われわれは, 最近本邦第2例目の臍帯血管腫を経験したので報告する.

2) 研究方法および研究成績: 文献的検討の結果, 本邦第2例目のきわめてまれなものであることが判つた.

組織学的には胎盤の血管腫は比較的多いが, 本症例は臍帯の血管より発生する血管腫であることが判つた.

元来, 臍帯の血管異常は胎児に対する血行障害のため, 子宮内胎児死亡を来することが多いが, 本症例は, 正常分娩にて健児が得られた珍しいものと考える.

180. E(18) Trisomy 症候群の1例

(東京医歯大) 熊坂 高弘, 斉藤 幹
西 望, 加藤 広英

父は50才, 母は44才で初産, 妊娠2カ月の終りに胃のX線撮影を行なつておる. 母は小児麻痺による下肢の麻痺のために帝切分娩を行なつたが未熟の徴候強く15日目に死亡した. 患者は身長40.0cm, 障重1,870gの女児で栄養不良, いわゆる shape of head, low-set ears, small palpebral fissure, triangular mouth, micro gnathia があり, さらに左外道の欠損が認められ, 胸部は突出して鳩胸状を呈し, 外陰部では肛門が異常に高いがいわゆる funnel anus は認められなかつた. 四肢では著明な奇形があり左手は小指, 環指のみで他趾は欠損, また右手は小指欠損と合趾症が認められ, 左足では第1趾が dorsal flexion の状態で右足では第1趾と第2趾の合趾症があ

るが、rocker-bottom feet は見られなかった。剖検所見では心臓では心室中隔欠損、大動脈の狭窄、右室拡大あり腹部では Meckel の憩室と異所性の pancreas が空腸の腸間膜に見られ、脳は外見上は正常であつたが小脳部に異所性（白質）に神経細胞の混入を見た。肝脾に extramedullary の Haemopoiesis が見られたが、hepatitis や Billiary atresia の所見はなかった。死因は肺出血と考えられ、生前の末梢白血球培養による染色体の検索を行なつたところ 18-Trisomy が認められた。

181. 45,X/46,XY/46,XXの染色体構成をもつ半陰陽早産児の1例

（富山県立中央病院）

○矢吹 朗彦，館野 政也

われわれは、最近染色体構成 45,X/46,XY/46,XX を持つ早産未熟児を経験したので報告する。児は36週で経膈的に自然分娩され、生下時体重 1,770 g、身長42cmであつた。両親の家族歴、既往歴には特記すべきことはない。生下時児の外生殖器は、女性のそれに近く、大陰唇に囲まれた大きな陰核と、その直下に尿の排泄口があるものに見えたが、また一見尿道下裂を伴つた陰茎とも取れるものであつた。生下時には睾丸様物質は触れなかったが、生後10日目ごろより右単徑部に小腫瘤の出現を見た。性染色質は陰性で、染色体構成は、45,X/46,XY/46,XX のモザイクを示す。200細胞検索による Hystogram では、45本のものが69%、46本のものが17%を占めていた。なお分析数が少ないため不確実さを残すがXXの性染色体を有す 46,XX, 44,XX,A-,5-および 45,XX,3-の核型を示すものが計5個見られた。尿の排泄をみる管口から造影剤を注入し撮影したレ線写真では子宮様の陰影は認められず男性型尿道と膀胱があつた。次に切開手術により右単徑ヘルニア内容として確かめられた腫瘤は、あたかも附属器を思わせるものであつたが、組織鏡検により Testis と Oviduct であることが判明された。以後児は順調に発育し現在体重 6,370 g、身長64.5cmとなつてゐる。なお2次性徴の発現によつておこる混乱を最少限に止めるため近日中に開腹し、将来の社会的性を方向づける整形手術を試みる予定である。

182. ミルクの製品改良による乳児の発育状況の差違について（単一銘柄に於ける比較）

（東京医大霞浦病院）宮野 誠

（森永乳業水戸）○稲川 隆子，鹿目 静夫

ミルクの製品改良はその母乳化を目標にしているが、

かかる改良の意義を乳児検診成績から比較検討した。東京医大霞浦病院で生後1年までの乳児中90%以上が森永製品使用者なので、森永のダブルG（W）・ダイヤG（D）・クラウンダイヤG（C）使用児を、各製品発売期間の母乳児と比較した。

身長は性・栄養法・製品別に差がない。

体重は人工（人）・混合（混）とも発育はDが最良でW・Cの順だが、母乳児（母）でも同様で、発育時期の年次差を思わせる。これは体重増加率（各月令の体重÷生下時体重）でも全く同様であつた。そこで母を基準とした「対母乳児・体重増加率・比」（各月令体重増加率÷当該月令の母乳児体重増加率）を算出し比較したところ、Wは人・混とも月令2—3で母を上回り、離乳開始時に一旦母に接近、以後再上昇するに反し、Cは人・混とも月令3—4で母を上廻り、以後次第に下降して月令9—12で母と一致する。Dは人はW型で混はC型をとる。すなわちWはいわゆるミルク肥満児の傾向をもつが、Cの肥満傾向は一時的で離乳とともに消え去り、Dはその中間すなわち移行型とみることができる。Kaup指数・1日当り体重増加量とも同傾向を示した。

母乳児を基準としてミルク児の発育状況を見ると、W→D→Cと母乳児に接近しており、母乳化を目標としたミルクの製品改良は歩一歩その目的に近付きつつあるといえよう。

183. 酸素消費量より見た分娩の新生児に及ぼす影響

（三重県立大）塩井 澄夫

分娩を契機として、それまでの胎内生活と全く環境の異なる子宮外生活への適応を余儀なくされる新生児期にあつては、分娩が新生児のエネルギー代謝におよぼす影響は多大なものであらうと想像される。

今回私は各種分娩様式により娩出された新生児につき、酸素消費量の面からその影響について調べ、若干の知見を得たので報告する。

測定装置はビニールフードを用いた開放式基礎代謝測定法である中川式変法を用い、ダグラス囊に採集した全呼気の一部を Scholander 微量ガス分析器にて分析し酸素消費量を求めた。

対象とした新生児は満期正常産児55例、帝切児10例、骨盤位分娩児5例、仮死児9例、吸引分娩児、早産児各8例の合計82例で、各々分娩直後、6時間目、12時間目、以後逐日的に6日目まで、合計8回の測定を原則とした。

実験成績は次の通りである。（1）正常産児において